# CAPNA

## キャプナニューズレター70号

連休初日に、悲惨な深夜バス事故。
格安ツアーの過当競争の中、交代要員を省くなど経費をぎりぎりまで切り詰めた経営の問題が指摘されています。
社会全体を覆う余裕のなさ、ゆとりの乏しさが、事故の遠因である気がしてなりません。
子どもが育っていくには長い時間がかかるもの。
余裕を持って見守れる大人たちを、増やしていきたいものですね。

Vol. 70

## 〈BP プログラム〉ファシリテーター養成講座を開催

親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！（BP）」は、０歳児を初めて育てている母親のための、「仲間づくり、親子の絆づくり、少し先を見通した育児の知識の学習」を目的にしたプログラムです。母親が感じている育児不安の軽減や児童虐待の予防にも効果を上げることができます。
このBP プログラムを実施するファシリテーター養成講座が、３月２４・２５日の２日間にわたり、ウィルあいちを会場に２１名の参加者で開催されました。

養成講座では１日目にプログラムの内容を理解し、２日目は人形を赤ちゃん代わりにセッションの進め方を学びました。
まだ比較的新しいプログラムである BP は、これから多くの地域で実践されることが期待されています。CAPNA スタッフも多数参加しての楽しい講座となりました。

### お知らせ

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち（CAPNA ）は、このたび名称を変更し、「特定非営利活動法人ＣＡＰＮＡ」となりました。従来の正式名称に比べ、CAPNA の愛称が定着しているためです。
税制上の優遇処置を得られる認定 NPO を取得しているので、認定ＮＰＯ法人ＣＡＰＮＡと称します。

※4/22「こうのとりのゆりかご基金」への募金が 18,500 円ありましたので送金いたしました。

**ご寄付**　皆様からご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。

【個人】　（2012.1.1～2012.3.31 分、順不同・敬称略）
渡辺康子、水野タズ子、植田有里子、西牧洋子、刀根由紀子、塩出澄子、茶谷裕子、朝見巳幸、白石淑江、矢満田篤二、石田金司、岩城正光、萬屋育子、柴田美智子、田崎淳子、井上光子、早川真理、今西洋子、兼田智彦　他匿名希望３名

【団体】
名古屋ＳＯＲＡゾンタクラブ、ブレーンバンク株式会社、北海道議会議事課


**CAPNA ニューズレター　７０号**
2012 年 5 月 1 日発行
発　行　認定 NPO 法人　CAPNA
事務局　〒460-0002　名古屋市中区丸の内 1-4-4-404　TEL.052-232-2880　FAX.052-232-2882
印　刷　社会福祉法人名古屋ライトハウス光和寮

# 「ゆりかご」の情熱と技術に学ぶ

## 田尻由貴子さん招きセミナー

熊本市の慈恵病院（蓮田太二理事長）が取り組んでいる「こうのとりのゆりかご」の活動が５年を迎えました。当初は「育児放棄を助長する」などと反対もあったものの、小さな命を守り、親たちを支援する機関として、実績を積み重ねてきました。同病院の看護部長・田尻由貴子さんを招いて、４月 22 日、名古屋でセミナーを開催しました。その講演と、以前の取材をもとに、「望まない妊娠」の問題について「ゆりかご」から見えてきた現代社会の課題を紹介します。（理事・安藤明夫）

慈恵病院の現在の産科病棟ができる前に、取材にお邪魔したことがあります。
病院の正面玄関わきに「まずは相談してください」と大書した目立つ看板。相談窓口のフリーダイヤルも掲示されていました。赤ちゃんを預かることが「ゆりかご」の目的ではなく、悩む親たちの相談を受け付けるための活動だという理念が伝わってきました。

病院前の大きな看板で相談を呼びかけ

お会いした田尻さんは当時、3 日に１回のローテーションで、24 時間の電話相談を担当していました。

夜中も、枕元に携帯電話を置いて就寝します。

10 代の少女から夜中に「いま赤ちゃんが生まれてしまった」とうわずった声で相談の電話がかかってきたこともあったそうです。

電話を受ける側がうろたえると、相手が不安になって切ってしまうので、心を落ち着かせ「近くにタオルはある？」「ご両親はどこにいるの？」と短い質問を重ねて状況を把握し、赤ちゃんの命を救うことに成功したそうです。

こうした緊急対応があるため、経験豊かな師長クラスの３人が分担して、相談を受け付けていると話していました。現在は担当者が１人増え、田尻さんは院内にいる時間帯だけの担当になったそうです。この活動がいかに多くの努力と熱意によって支えられているかを、反対論者の人たちも知ってほしいものです。

講演によれば、「ゆりかご」に子どもが預けられた例は、4 年間に７５件ありました。その多くは、親の身元も判明しており、熊本県以外の九州が 19 件、関東１８件、関西８件、中部７件、中国５件、地元熊本が３件、不明 15 件と全国に散らばっています。「こっそりと捨てていく」というイメージではなく、追い詰められた気持ちで助けを求めてくる人たちが多いようです。

また、電話相談は４年間で 2077 件。相談者は、20 代と 30 代がそれぞれ 40%。10 代の相談者も 16%に達しています。田尻さんは、いくつかの事例を紹介しました。

### 児相が重い腰を上げる

離婚したばかりで、出産間近の 23 歳女性。出生届を出すには、元夫の承諾が必要だが、父親が違うので、元夫に妊娠を知られたくない。生まれてくる子の父になる男性も妻帯者い」と言う。地元の児相に相談するように勧めたが、地元児相はこくない様子。熊本児相を通じて依頼し、ようやく対応してもらった。

電話相談に応じる田尻さん

### 自ら育てることを決意

29 歳の女性が、望まない妊娠をした、と母親から相談。
本人や両親と数回にわたり面談。当初は特別養子縁組も検討したが、本人が自分で育てることを決意。両親も「生まれてくる子の幸せを第一に考えたい」協力することになった。

### 若年妊娠で特別養子縁組

16 歳女性の父親から妊娠の相談。本人は、16 歳の彼と結婚して子育てすることを希望するが、父は大反対。一時は本人が家出し、連れ返してもすぐに家出する状態だった。

妊婦健診で本人と面談。本人は彼やその家族の気持ちも考え、悩んだ末に特別養子縁組を決意。

その他、レイプによる妊娠の事例、緊急の未受診出産の事例なども紹介されました。

相談によって赤ちゃんの命が救われた事例は、「自分で育てる」と本人や家族が決意したケースが 142 件、特別養子縁組が 113 件、乳児院の一時保護が 22 件でした。

相談を受ける際に大切にしているのは、①傾聴する②共感する③親身になる④より添う⑤責めないーの５点だそうです。
望まない妊娠の問題は、家族のコミュニケーション不足、孤立、社会性の未熟さ、経済的不安などさまざまな問題が重なって、生まれてくる子の存在が重荷になっていきます。本人の苦しみを受け止める姿勢が、解決への第一歩となるわけです。

講演の最後を、田尻さんは次の言葉で締めくくりました。

私たち CAPNA の活動においても、心に刻みたい言葉です。

- **愛の反対はにくしみではなく、無関心である。**
- **命は生きています。その命を守りなさい**
- **愛を種まきして熟するのを待つと平和という果実が実ります。私たちは愛するため、そして愛されるために生まれてきたのです。**
- **大切なのは　どれだけたくさんのことをしたかではなく、どれだけ心をこめたかです。**

慈恵病院に続く取り組みは、日本のどこにも生まれていません。よほどの熱意と地元行政の協力がなければ、成り立たない活動です。しかし、多くのニーズがあることも事実です。特別養子縁組の普及と合わせて、考えていきたい問題です。